
ドラゴン

タルミ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラゴン

【コード】

N9029E

【作者名】

タルミ

【あらすじ】

龍応高校野球部に入った”ドラゴン”こと神谷太一が夢である甲子園を目指す物語が今幕をあける。

プロローグ（前書き）

初めて書いた小説なのでご意見ご感想があればください。よろしく
お願いします。

プロローグ

>>プロローグ<<

二人の男がここ東京龍応高校に来ていた。

一人は赤い髪で右手に龍の形をしたアザがある男で名を神谷 太一

(カミヤ タイチ)と言う。

人々は龍の形のアザを見て彼をドラゴンと呼ぶ。

そして彼の横に立つ金髪碧眼の男は名を大和 一琉 (ヤマト イチル)と言つて、タイチの幼なじみであり親友でもある。

「なあ、イチルよう入学式もすんだし野球部のグラウンドに行こうぜ」

「そつだな今日からさつそく野球部の練習だったな」

「くうっ楽しみだぜ。俺たちの夢”甲子園”出場をかけて、今日から戦いの日々だぜ。イチルよ」

「そつだな。どんな一流プレイヤーと戦えるのか、楽しみだ。」

「よっしゃー行くぜ野球部に、急げよイチル」

「わかつたから騒ぐな恥ずかしい」

二人は野球部へと向かった。この日から龍応高校が甲子園を目指す戦いの日々が始まり、そして”ドラゴン”こと神谷 太一の伝説もこの日から始まった。

プロローグ（後書き）

駄文ですいません。

新入部員紹介

タイチとイチルが野球部グラウンドに行くと、すでに数人の部員が集まっていた。

(やべえ、遅れてきたから怒られっかな)とタイチが思っていた。その時、

「タイチ〜。イチル〜。早くこつち来なよ〜。」とメガネの野球部員が呼んでいる。

「あいつ、ジヨウじゃないか？」とイチルが言った。

「…あ！〜ほんとだマコちんだ。お〜いマコちん〜」と言って、タイチは近寄って行った。それにイチルも続く。

「それにしても久々だな、タイチにイチル元気だったか？」と聞いてくるこのメガネの男名を城ジョウマコト 誠マコト。タイチとイチルの幼なじみにして一個上の先輩である。

「おう、マコちん元気いっばいだぜ俺は!!!」

「俺も元気だ。」

「ははっ！二人とも元気だなによりだ。まあ話しはこれくらいにして、二人とも並んでくれ。これから君たち一年生一人ずつに自己紹介してもらおうから!!!」と言ってタイチやイチルを並べせた。

「僕の名前は城 誠と言います。二年生で副部長をやっています。

この部には三年生がいないので部長も二年生だが、今部長はいないので、ここは僕が仕切らせてもらう。では最初に新入部員の君たち

に自己紹介をしてもらおうと思う。名前と出身中学とポジションあ
と言いたいことがあるればなんでもいいから言ってくれ。では左の君
からしてもらおう。」

「自分は白木 朱雀 (シラキ スザク)と言います。興戸^{ウキド}中学出
身でポジションはセンターです。先輩たちのプレーを見ているいる
学んでいきたいと思うので、よろしく願います。」

「同じく興戸中学出身、黒崎 瑠璃 (クロサキ ルリ)だ。ポジ
ションはキャッチャー。一言いわせてもらうなら、俺がリードすれ
ばどんなへらいピッチャーでも勝たせる自信はある!!!!以上だ。」

その言葉に先輩やタイチたちがシーンとなるなか、横にいた男が口
を開く。

「えーっと、こいつは昔から大物ぶるんですよ。すいませんあとで
キツク言っとくんでマジすいません。ではここで自己紹介にもどっ
て、前の二人と同じく興戸中学出身、小早川 陸 (コバヤカワ
リク)って言います。ポジションは、セカンドを主に守ってました
が、内野ならどこでも守れます。俺は足の速さなら誰にも負けませ
ん。以上です。」

「僕は周馬 公喜 (シユウマ コウキ)と言います。南洋中学出
身です。ポジションは主にレフトですが、外野ならどこでも守れま
す。これからよろしく願います。」

「俺は大和 一琉 (ヤマト イチル)だ。龍洞^{リウドウ}中学出身だ。ポジ
ションは、俺は一流だからどこでもできる。夢は”甲子園”に出場

することだ。以上。」

その一言で場がシーンとなるが、一人だけ笑っていた。

「わははははは。さすがイチルだぜ。よく言った。じゃあ俺の自己紹介だな俺の名前は、神谷 太一（カミヤ タイチ）。龍洞中学出身。あだ名は”ドラゴン”ポジションはサード。夢は”甲子園”に出場すること。好きな人はまだいません。あと彼女募集中なんです誰か紹介してください。えつとあとは…」と言ったところで、「タイチも面白いよ」と城が止めた。

新入部員紹介（後書き）

駄文ですいません

上級生自己紹介と新入部員実力テスト（前書き）

読んでくれた人はぜひ感想や意見をください。

上級生自己紹介と新入部員実力テスト

「えーと、新入部員の自己紹介が終わったので、僕たち上級生が自己紹介します。まず僕から、改めてまして、城^{シヨウ} 誠^{マコト}です。ポジションはショートです。よろしく。では続きましてガク君自己紹介どうぞ」

「佐山 岳（サヤマ ガク）だ。ポジションはファーストだ。よろしく。」

「佐島^{サシマ} 拳司^{ケンジ}。ポジションはサード。よろしく。」

「そして最後にこの剛速球エース山田 次郎だ。一年どもこのエース山田を敬えよ。」

一年全員の心の中（うぜー！！死ねばいいのに）

一年全員が機嫌の悪そうな顔を見て城が

「ま、まあこれで全員の自己紹介が終わったので、これから一年の実力をみたいので、山田に10球投げてもらってから、それを一年に打ってもらって、どういうバッティングをするか見るから、じゃあ自己紹介した順番でいくから、白木君から行こうか。」

「じゃあ、白木君バッターボックスに立って、僕がキャッチャーや

るから。」と城

スザクはバッターボックスに入り、土をならす。

「はははっ。いくぞ一年坊俺の球にビビるなよ。」と山田が言った。そして大きく振りかぶって投げた。

カキーンと音がなり、ボールはフェンス直撃。打たれて山田は呆然とし、見ていた一年は唾然としていた。それはスザクが打ったからではない。山田の球がムチャクチャ遅いことにだ。

「なんだあれムチャクチャ遅せー。どこが剛速球エースだよ。」とタイチ。

「フン、三流プレイヤーが口だけか。」とイチル。

「ヤツがエースだというならリードのしがいがあるな」とルリ。

「でもあんな遅いのリードするの苦労するぞルリ。」とリク。

「そんな風に言ったらいけないよ。みんな。」とコウキ。

会話しているうちにスザクが打ち終わった。結果は10球全部クリーンヒットだった。

それから一年生は次々に打っていきイチルに順番が回ってきた。

イチルがバッターボックスに立つ。カキーンという音が10回鳴ったと思うと全部クリーンヒットで終わっていた。タイチがナイスバツティングと言うと、

「あの程度のピッチャー打てて当然だ。俺は一流だからな。それはそうと次はタイチの番だろ。お前あの遅い球打てるのか。」

タイチは当たり前だろといい、バッターボックスへ向かう。

(あいつは打てないだろうなとイチルは思うのだった。)

「おっしやーこいやー！山田 太郎」とタイチ。

「次郎だ。コノヤローくらいやがれ俺の剛速球うつー」と山田。

「もらったー！！」とタイチ。ブオンと大きな音をたてタイチは空振りした。

「チクショー！！テンポ早かったかー！」といい悔しがっているタイチ。そしてそのあと、ブン、ブン、ブオン、ブオン、ブン、ブオン、ブン、ブンと九回連続で空振り。見ていたイチルたちは話していた。

「ねえイチル。タイチってバッティング下手なの」とスザクが聞くとイチルは、

「いやタイチは、遅い球や遅い変化球にトコトン弱いんだ。だがスザクあいつのスイングスピードとパワーは一流だ。だからタイミングさえあえばいい。」とイチルはスザクにいった。

「タイチー！よく見て打てー！当たれば飛ぶんだ。ラスト一球集中しろ。」

「わかってらーイチル。黙って見てろ。」とタイチ。

(集中しろ。よく見て振ろうぜってえ打つ。)

「オラーラストいくぞ一年坊」と山田が投げる。

ゆっくりと向かってくる球が行き過ぎていく。スザクたちは完全に

終わったと思った。しかし、タイチはここだといわんばかりにバツトを振り抜いた！！ボールはサクを余裕で越えていった。

「ヨッシャー！！ホームランだああああーらっしゃー！！！！！」
とタイチが吠える中全員が啞然としていた。それはタイチのありえないスイングスピードと推定160メートルの大ホームランをみたからである。

（さすがタイチだなとジヨウは思った。）

「よし全員集まって、一年生の実力もわかったし今日の部活は終了。これからはこのメンバーで戦っていくことになる。人数は少ないけど頑張っていこう。」とジヨウ。

全員

「はい！！！！！！！」

「じゃあ今日は解散」

みんなが帰ろうとした時

「あ！？そつだ再来週練習試合だから頑張ろうね！！」とジヨウ。

全員

「ええーっ！」

上級生自己紹介と新入部員実力テスト（後書き）

駄文ですいません

スタメン発表

練習試合発言から早くも12日がたち練習試合まであと2日となった。そんな練習試合を明後日ひかえてスタメンを考えているジヨウであった。

ジヨウ視点

「はあくどうしようスタメン」と言いながらジヨウは、悩んでいた。あの実力テストから12日たち新入部員のみんなも練習に慣れてきて、いろいろとみんなのプレーを見せてもらい、ポジションや打順を考えているが、なかなか決まらない。

「まずは一番バッターだよな、最有力は小早川君か白木君だよな。うーん悩むな。」

「小早川くんは、右投げ左打ちで足が部内で一番速い。部内で50メートルを計った時には、5.7秒とムチャクチャ速かった。でも打撃はあまりよくない、選球眼も悪い。足をいかすために、バントや叩きつけるのは上手いが、長打がない。守備は安定しているし、守備範囲も広い。走塁も上手いし、相手の投手のモーションを盗んだ盗塁も上手い」

「次に白木君は、右投げ両打ちの部唯一のスイッチヒッター。身体能力も部内で一番高いし、選球眼もよく、ボール球を振らない。打撃面では長打力もあるし、バットコントロールいい。足は部内で二番目に速く5.8秒でかなり速い。走塁も上手く盗塁も上手い。その足をいかしたセンターの守備も上手いし、守備範囲も広い。肩も遠投120メートルと強く送球いい。まさにメジャーでいう5ツールプレイヤーだな。5ツールプレイヤーとは、肩力・守備力・

走力・巧打力（高い打率をのこせるバットコントロール）・長打力の5が全部すぐれている選手のこと。

「やっぱり一番は白木君で二番は小早川君にしたほうがいいかな、俊足のー、二番コンビでいこう。」

「次に三番は、イチルだなこれは最初から決めてたからな、左投げ左打ちでバットコントロールはチームで一番あるし、長打力もある。その状況にあったバッティングつまりケースバッティングもできるし、足も白木君と同じタイムで速い。守備も上手く、ポジショニング（あらかじめ打球方向を予測する能力のこと）も上手い。そしてなにより、肩がめちゃくちゃ強い。なんと遠投150メートルで部内No.1だ。僕が思うに世界でもトップクラスだと思う。本人に聞くと

「一流プレイヤーなら肩が強いのは当たり前」らしい。まったくもって恐ろしい。イチルはどこでも守れるがその強肩と守備力をいかしてライトを守ってもらおう。」

「次に四番はタイチで決定だな。タイチは遅い球や遅い変化球には弱いが、速球にはものすごく強いし、勝負所では必ず打ってくれると思う。それにタイチには、誰にも負けない動体視力とスイングスピードそしてパワーがある。守備も速い打球への対応もいいし、グラブさばきもなかなかだ。肩も遠投130メートルで部内で二番目に強い、ただ一つ問題は送球が悪い所かな。」

「次に五番はガク君かなあの体格のよさとタイチにもまさるパワーで長打を狙ってもらおう。ファーストの守備もあの柔らかいグラブさばきはかなりいいからな。弱点はタイチとおなじで速球には強いが変化球に弱いところかな。」

「それで六番ショート僕で決定と」

「七番は黒崎君だな意外に長打力あるし、キャッチャーだから配球よんで狙い打ちもできると思う。守備もうまくボールを後ろにさらさないし、捕球技術もかなりのものだ。あとは頭脳をいかしたりリードを期待だな。弱点は体が細い所かな。まあこれから鍛えていけばいいか」

「次に八番は周馬君。彼は地味だが多分部内で一番選球眼がよく、粘り強い。それにバントなどの小技もうまいし、足も地味に速い。守備も地味に上手い。肩も地味に強い。」

「そして九番山田で打順完成。あとケン君は代打でよし。今日ももう疲れたから早く寝よう。」とジョウは寝てしまった。(山田とケンのいいところと弱点とかいってやれよ。あと自分のこともちゃんと言えよ。と作者は思った。)

翌日の部活の時間ジョウは部員を集めて打順を発表した。

「一番(中) 白木

二番(二) 小早川

三番(右) 大和

四番(三) 神谷

五番(一) 佐山

六番(遊) 僕

七番(捕) 黒崎

八番(左) 周馬

九番(投) 山田

そして控え佐島だ。当日は、このメンバーでいくよ。そして明日

の相手は去年ベスト16の三橋学園だ。みはしがくえんベスト16だろうが関係ない絶対勝つ。気合い入れていこう!!!」

「一流はベスト16なんかに負けはしない。」

「明日は絶対勝とうねルリ」

「フン俺がいるんだ負けるわけないだろスザク。」

「また大物ぶりやがって。ま、負ける気はさらさらないけどね。」

「明日は勝つぞー!!」

「「「「おおうー。」「「「「」

そして練習試合当日をむかえる。

練習試合開始（前書き）

読んでくれた人できれば感想か評価ください。

練習試合開始

練習試合当日龍心高校に集合した龍心ナイン。全員集まったのに、なぜか出発しない。

「おい、マコちゃんなんで出発しないんだ。」とタイチが聞くと、ジヨウは

「今日はマネージャーを呼んでるんだ。もうすぐ来るから待ってくれ。」

「つーかマネージャーいたのかよマコちゃん？」

「いるよタイチもよく知ってる人だよ。」

それから10分後、黒髪のロングヘアのきれいな女の子が走ってきた。

「ごめん誠遅れちゃった。」

「いいよユリちゃん。」

「なんで姉さんがマネージャー」とイチルが驚く。

「誠話してなかったの？」

「ごめん言っただけだった。みんな紹介するけど、大和 由梨華（ヤマト ユリカ）さん。イチルのお姉さんで、野球部のマネージャーをやってもらってるからユリちゃんみんなになにか一言。」

「マネージャーをやっている大和 由梨華です。よろしく。」

「まああいさつも終わったことだし、三橋学園に行こうか。」

そして三橋学園に到着、ジヨウは向こうの監督に挨拶し、いよいよ試合開始。

ともにボールは転がり、敵のサードがボールをとるが投げられず、そしてランナー一塁で三番イチル、二球目のカーブを投げたときにリクが走り楽々セーフ。続く三球目アウトコースのスライダーを逆らわずレフトに打ち返し二塁打。俊足のリクがあっという間にホームに帰り二点目。

続く四番タイチ

「しゃらあーこいやー」と叫び気合い十分だが、前田のカーブを打ち上げピッチャーフライでワンアウト。五番のガクは変化球にタイミングが合わず三振。ジョウのヒットで三点目を入れるが後続が打ち取られてチェンジとなった。

"あの球" (前書き)

読んでくれたかたぜひ感想ください。お願いします。

"あの球";

三橋側ベンチでの会話

ベンチにいた一年生の一人が言った。

「あれどっかで見たと思ってたんですけど監督あの一番と二番とそれに七番はあの全中準優勝の興戸中の白木と小早川それに黒崎ですよ。」
「なに！？なんでそんないいところの選手が龍応みたいな弱小校にいるんだ。」と三橋学園監督田岡が叫ぶのであった。

そんな田岡の叫びも知らず、話は進み。

1回裏三橋学園の攻撃は一番の山下から。

ここからはキャッチャーのルリ視点

（一番は山下かこいつは長打力はあまりないし、選球眼も悪い。ここはインコースのボール球で仕留めるぞ）と山田にサインを送る。山田はサインどおり投げ一番の山下をセカンドゴロに仕留める。（最近の練習で俺は山田の投手としての長所に気づいた。それはコントロールがずば抜けていいことだ。球が遅くともこのコントロールと俺のリードが合わされば三橋の打線など恐れることはない。しかも山田はキレのいいスローカーブとチェンジアップを持っているし俺と一緒に昨日まで練習していた”あの球”があれば今日は確実に勝てる。）そして二番の清本もショートゴロに打ち取りツーアウト、そしてむかえるは三番松井。

（こいつは要注意人物だ。一球はずせ）とサインを送る。しかし、はずしかたがあまく打たれる、すかさずタイチが飛びついてファーストに投げる

「オラァー」といいながら投げたボールは大暴投になり、ツーアウトランナー2塁になった。タイチは山田に

「すんません太郎ちゃん」と謝る。

「だから俺は次郎だいい加減覚える。」とキレていた。しかし、ピンチは続くランナーを2塁において4番坂口。

(タイチのせいで余計なランナーを出してしまったな。まあいい。ここで四番を打ち取れば、流れはうちにくる。ここはまずインハイにボール二個分はずしたお前の全力のストレートだ。) 山田はサイン通りに投げた。坂口は思いつき引つ張りファール。(よし次はアウトコースにスローカーブ) 坂口は空振り。(よしいいぞ。さっき投げたストレートが効いてる。山田のストレートMAXが121キロ。スローカーブが80キロつまり球速の差が40キロ。これはバッターにとつてはかなりの球速差だからなうちずらいはずだ。よし次は全力のストレートをアウトコースに完全にはずせ。) 一球はずして、カウントツーワン。(よし今のストレートで”あの球”がいきる。次は”あの球”でいくぞ。これでチェックメイトだ。)

坂口視点

(チツなんて遅い球だ。うちづらくてしかたねえ。まあこんな遅い球。次で仕留める。)

山田が振りかぶり、4球目を投げた。

(なに!?なんで球が止まってやがる。なんだこの球?)

坂口は混乱しバットを振った。

ストライクバッターアウト!! 審判の声が響きわたった。

「おい、キャッチャー。今の球はなんだ」と聞いた。

キャッチャーは不敵に笑ったあと答えた。

「魔球ですよ。」

(クツ舐めやがって何が魔球だ。次こそはあの球を打ってやる。)
と坂口は心に決めた。

"あの球";(後書き)

まだまだ試合は始まったばかりです。この熱戦はまだまだ続く
者

ドラゴン外伝(前書き)

感想などあればください。

ドラゴン外伝

坂口を打ち取ってベンチにもどった龍応ナインは騒いでいた。

「なんだよあの遅い球はよ太郎先輩。」とタイチ

「あれは超スローボールだ。球速は40キロのな。」とルリ

「マジかよそんな遅いのかよ。ある意味魔球だな。うーん超スローボールって名前は格好よくないなあ。そうだ！」鈍亀ボール”って名前はどうだ？」とタイチ。

「なんで”鈍亀ボール”なんだタイチ？」とイチル

「太郎先輩はいつも亀みたいに遅いボール投げるから、それがもつと遅くなって、鈍足な亀並みの遅いボールだから”鈍亀ボール”だ。」

そりゃあいいなと全員が笑って話している中一人浮かない顔をしている男がいた。

その男は山田次郎”鈍亀ボール”を投げた張本人である。

(鈍亀かそういわれると昔を思い出すな。)と山田は昔のことを思い出していた。

ここからは山田次郎の過去の話しになります。

〳〵ドラゴン外伝〳〵

亀と言われた男山田次郎ものがたり

これは山田が中学生のころの話になります。

ここは長野松方中学校
まつかたちゅうがくこう

通称松中

この学校は中高一貫となった学校で野球部などの部活も強い。

そのグラウンドで今練習試合が行われている中一人だけ不機嫌な顔をしている。この男の名は、山田次郎。松中野球部のお荷物的存在で、部員から亀と呼ばれている。なぜ亀と言われているかと言うと、中三にもなつて、ストレートのMAX90キロとめちやくちや遅いの
で、まるで亀だなと言われ、それ以来野球部全員に亀と言われている。
る。

(なんで俺だけ練習試合に出れないんだ。今日はダブルヘッダーだから全員出れるはずだろ)

「か、監

「監督なんで山田君を出さないんですか？」とマネージャーである高田美和たかたみわが言った。

「フン、そんな球の遅い奴を出して何になる。打たれて名門松方中学校の名に傷がつく。」と監督は言った。

「なんでそんな風に次郎のことを言うんですか？ひどす

「いいよ。美和」と山田は言った。そして監督に

「体調が悪いので帰ります」と言つて足早に帰つていった。

場所は移り山田の家

(やっぱり、もう野球部辞めようかな、俺の中学三年間は、何だつたんだ。1日も休まず部活には出だし、家でも的を自分で作つて練習してきた。どんなに努力しても誰も俺を認めてくれなかった。よし明日にでも監督に話して野球部辞めよう。)と心に決めた。すると、部屋のドアがノックされた。

「入るよ次郎」と言つて、美和が入ってきた。そう俺と高田美和は、

家が隣の幼なじみだ。学校ではあまり馴れ馴れしくしていない。だから学校では高田と呼んでいる。

「なんだよ？美和」

「なんだよじゃないわよ。なんで途中で帰ったりしたの。試合でれたかもしれないの？」と怒っていた。

「でれねえよ監督に嫌われてんだ。それにもういんだ。野球部辞めるから。」

「本気なの。本気で辞めようって思ってるの？」

「当たり前だ。三年間頑張ったけど、誰も俺のことなんか見ちゃいねえし、俺には才能もない。だからもう辞める。」

「私、次郎が頑張ってる所見てきたよ。部活が終わっても残って練習してたし、家でも練習してた。なのになんで、辞めるとか言うの。辞めないでよ次郎。大好き何でしょ野球」と言い終えた美和は泣いていた。

「な、泣くなよ美和。それに野球部辞めるだけだから。野球は高校でもやり続ける」

「えっそうなの。な〜んだ次郎大好きな野球辞めるのかと思った。泣いて損した気分よ。でも高校って言っても、松中はエスカレーターだから、松方高校でやるの？」

「いや東京に母さんのいところがないな、その近くに龍心高校って学校があるから、そこに行こうと思ってる。」

「えっ、東京の学校に行くのなんでどうして？長野の松高じゃない

所に行けばいいじゃない。」

「違うんだよ。ここにいたら俺は強くなれないと思うだ。だから松高でもなく長野の高校でもない東京に行つて俺は強くなるんだ。」

「わかつたわよ。勝手に行けばいいじゃない。東京に。もう知らないわよ。」

「なに怒つてんだよ？もしかして、俺と離れるのが寂しいのかよ」

「なっ、なに言つてんのよ。さっ、寂しいなんて思わないわよ。バカじゃないの。」

「俺は寂しいよ。美和と離れるの。」

「なっ、なに言つて」

「冗談だよ。冗談。うるせー幼なじみと離れるぐらい寂しくねえよ」

「このバカー」と赤面して美和は出て行つた。

それから俺は野球部を辞め、卒業式を終え、東京に行く日がやって来た。東京に行く新幹線に乗るため駅にいた。見送りは家族と美和だけだった。

「頑張つてきなさいよ次郎。メールぐらいしてよね。」と美和。

「わかつたよ。メールするよ。じゃ行つてくるよ。」

「じゃあね次郎、元気でね」と言う美和は泣いていた。

「美和も元気でな。じゃ。」と言って次郎は東京に旅立って行つた。

(あれから二年がたった。そして今、俺はクソ生意気な一年生キヤツチャールリと練習試合前の最後の練習をしている。)

「やっと完成したな。超スローボール。これで明日は完璧に勝てる。」とルリ。

「おい、本当に勝てるのか？こんなボールで？俺は中学の時一回も試合でてないから不安なんだよ。」

「愚問だな、俺がリードするんだ負けるわけないだろう。だからお前も自信を持って投げろ。お前はいいピッチャーだ。それにたかが練習試合で、緊張していたら、甲子園にいった時、どうするんだお前は？」

「甲子園って、また大きくでたな。本気がよ。」

「ふん、また愚問なことを言うなお前は。俺がいる、スザクモリクもイチルもいる。それにタイチとその他もな。このメンツで甲子園に行けないほうがおかしいだろ。そしてお前を俺が甲子園で勝たせてやるよ。それで、お前を日本一のピッチャーにしてやる。」

(こいつなんて夢みたいなことを言ってるんだ。俺が甲子園で勝つ。日本一のピッチャーになる。そんなことは有り得ないと思う。けどコイツが言つと、なんか信じられる。信じてみるか、この生意気な相棒を、そしてチームメイトを)

「じゃー明日は勝とうぜ黒崎！」

「なんだいきなりやる気をだしてるんだ？」

「甲子園に行くんだろ。だったらこんな練習試合前に悩んでるのは

馬鹿らしいだろ。だから気合い入れてこうと思ったんだよ。」

（そう俺は甲子園に行ってみせる、この生意気な相棒とこのチームのメンバーで。見てくれ美和は、俺は亀は亀でも”日本一の亀になるから”。）

と昔のことを思い出していると、「太郎先輩？太郎先輩？打順回ってきたぜ。なにぼうつとしてんだよ。」とタイチ。

「うるせーよ！集中してたんだよ。」といい打席に向かう。（こんな練習試合負けるかよ。なんせ俺は日本一の亀になるのだから。）

ストライクバッターアウト。と審判の声が響いた。

ドラゴン外伝（後書き）

山田が三振になってもまだ試合は始まったばかりなので、まだまだ続きます。

秘密兵器と主将

そして二回表、龍心 of 攻撃はランナーはだすものの、得点には結びつかず、二回裏の三橋の攻撃に移る。先頭バッターはピッチャーの前田。

ルリ（よし追い込んだ。最後は”決め球”の鈍亀ボールだ）
先頭バッターを空振り三振に仕留めて続く6、7番も打ち取った。

ルリ（いいぞ。”決め球”の鈍亀がくる前に打とうとして、打ち気になって、いい具合にボール球にも手を出してくる。このまま行けばうちの勝ちだ。）

そして回は、三回裏ツーアウトで、四番坂口に回る。坂口をツーストライク、ワンボールと追い込む。坂口（どうせ、決め球はあの遅いボールだろ。とっとと投げろ。打ち砕いてやる。）

そして放たれた一球は、山田渾身のストレートだった。もちろん、鈍亀ボールを待っていた坂口は、空振り三振。

ルリ（ふっ、バカめ。）

どうせ決め球は、鈍亀だと思ってたんだろ。”決め球”として鈍亀を使っていたのは、この為の布石だったのだ。”決め球”の鈍亀が頭にあるからこそストレートでいく。これであっちをさらに追い込めたぞ。なんせ”決め球”が鈍亀だけではなくったのだから。）

そして回は進み、八回裏五回にルリのタイムリーで一点を追加し、4対0でリードしている。

しかし、この回最初のバッター九番村田が、ヒットで出塁。
一番山下もヒットで続く。

続く二番の清本にはフォアボール。
ノーアウト満塁で三番松井。

ツーストライク、スリーボールでバッターを追い込んだ。ルリ（よし追い込んだ。ここはチェンジアップだ。）と山田にサインを送る。そして、放たれたボールは大きくそれたがなんとかルリが止めた。これでバッターは歩き一塁へ、一点をとられ、なおも満塁で四番坂口を迎える。ここでルリは審判にタイムを要求し、マウンドへむかう。

ルリ

「おい、急にコントロールが乱れぞ。疲れたのか？」

山田

「疲れてねえよ。いいから戻れよ」

ルリ

「わかった。バッター集中でいこう。あと二回だ。がんばれよ。」

ルリ（疲れてないとは言ったものの、かなり疲れてる。初めての試合の緊張で余計に疲れたんだろう。ここからはもっと慎重にいかねば。）

ルリ（ここは、低めのストレートだ。）

山田がセットポジションで投げた。

ルリ（なっ。バカが高めに!!!）

ガキンという音とともに、白球は飛んでいきホームランに。

三橋ベンチは大盛り上がり。

龍応内野手はマウンドに集まっていた。

山田は打たれたショックで落ち込んでいた。そこにタイチが
「まだ一点差になっただけだぜ。このあとのバッターを抑えていけばいいじゃんか。太郎先輩。」

城

「そつだよ。山田この回を抑えて次の攻撃で逆転すればいい。」

ルリ

「山田、打たれたのは俺のせいだ。だから気にせず、この回抑えていこう。」

山田

「わかった。」

そして続く5番バッター前田の打球はセンターに抜けるところを、城がとり反転スローでアウトにし、6番緒方のセンター前ヒットかというあたりを、スザクがダイビングキャッチし、7番見越はイチルがライトゴロに仕留めスリーアウトチェンジとなった。

そして九回表龍応の攻撃先頭バッターは、三番イチル。

タイチ

「よっしゃー。イチル絶対打つてよ。」

イチル

「タイチお前ノーヒットのくせになにを言っている。俺がでてもお前が打たないと意味ないだろう。タイチお前絶対打てよ。」

タイチ

「おう。絶対打つから絶対でろよイチル。」

イチル

「当たり前だ。俺は一流だからな確実にお前につなぐさ。」
そしてイチルはヒットで出塁。

タイチ（ここで打たねえと四番じゃねえ絶対打つ。）

しかしタイチは追い込まれて、カウントツーストライク、ツーボール。

タイチ（集中しろ。狙うのは決め球のカーブだ。引きつけて変化したところを叩く。）

そして放たれたボールはタイチの読み通りカーブだった。三橋の選手は完璧に振り遅れたと思いきや安心していたが、タイチののスイングスピードをもつてすれば十分に対応できた。”ガキーン”と音ともにボールはあつという間にサクの向こうへ。龍応ベンチはタイチのホームランに盛り上がっていた。

タイチ

「シャアーみたかイチルホームランだぜ。」イチル

「当たり前前だ。あのボールをお前のスイングなら余裕でとらえられる。だがよく打った。」

城

「よし、追加点を取るためガク君、君に代えてケン君を代打に送るよ。」

ガク

「ああ、そうしてくれ今日の俺は当たってないからな。」

タイチ

「なんでガクちゃん代えてケンちゃんなんだよ？ガクちゃんの方がパワーあるぜ。マコちゃん」

城

「まあケン君の打撃を黙って見てよタイチ。彼はうちの秘密兵器だから。」

そして代打佐島が打席に立った。

ツーストライク、ワンボールと追い込まれた。

タイチ

「おい、追い込まれたぞマコちゃん？やっぱガクちゃんの方がよかつたんじゃない。」

城

「タイチ。彼は足も遅いし、守備も上手くはない。だが彼は打撃という点だけは、イチルや白木君、そしてタイチ、君達に負けない打撃力をもってるんだ。」

そして今まで一度も振らずに立っていた佐島が待っていたかのように、カーブを打った。打球はサクを越えホームラン。

追加点をとり、この回さらに一点をあげ、最後の守備につく。

しかし、山田は体力の限界でノーアウト満塁のピンチを作ってしまった。

ルリは山田に駆け寄る。

山田

「もう俺を代えてくれ、これ以上俺が投げてたら、迷惑がかかる。それに俺は勝ちてえんだこの試合。だから代えてくれ。」

ルリ

「わかった。」

(しかし、どうする。ここで山田を下ろして、誰が投げる。やはりここはイチルしかないか。)とルリが考えていると。

「すまないな遅れた。おおーいい勝負してるじゃないか。」と声が出た。

すると声の方を山田は見て驚愕した。

山田

「なっ、なんでお前がここに?」

ルリ

「誰なんだあいつは?」

山田

「あいつはうちの主将だよ。」
ルリ

「なにっ!」遅れてきた男、主将の実力とは?

秘密兵器と主将（後書き）

感想ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9029e/>

ドラゴン

2010年12月4日04時49分発行